

コウヤノマンネングサは一見すると不思議な成長の仕方ですが、茎の途中にできた芽が伸びて新しい茎をつくりまわすから、高等植物にもよくみられる「仮軸分枝」といふ様式であることがわかります（毎年同じ茎の先端が伸びてゆくタイプは単軸分枝といえます）。またこうやってつくられた地上茎は、少なくとも三年程度は緑色を保って光合成をおこないますし、またそれ以降も数年は枯れた姿となって残ります。そのため、丁寧に地下部をたどりながら掘り取ってやると、毎年つくられた地上茎がいくつもつながった立派な標本を得ることができまゝ。日本の薔類の中では、オオカサゴケやフジノマンネングサが同じような成長の仕方をする。

### 名前にこだわらない

私が勤めている博物館が開催するセミナーには、小学生から高齢者までさまざまな方々が参加されています。私はコケ植物が専門ですので、隠花植物（花の咲かない植物のこと、キノコや地衣類、コケ、シダなどのこと）のうち、同僚の専門家がいるシダ類を除いた分類群に關係する講座を担当しています。植物にはまったく素人の方だけではなく、花の咲く植物はすでによく知っているけれども、もっとより広くいろいろな植物を知ろうという意欲的な方

が参加される場合も少なくありません。あるとき、まったくの初心者と多少とも知識のある人、両者で植物の名前の尋ね方が違うことに気づきました。詳しい方は自分で特徴を把握しそのうえで名前を尋ねるのですが、初心者の方は、自分が手に取った植物をあまり観察もせず、とりあえず名前はなんですかと尋ねるのです。確かに親しみが湧くことと名前を知ること、この二つが互いに分かちがたいものであることはよくわかります。とはいっても、あまり観察もせずただ名前を教えられただけでは、名前を知ったことで安心してしまい、それだけで満足してしまうのではないかと心配になります。人間の性として、得体の知れないものには畏れをいだき不安におののくだけども、とりあえず適当に名前をつけることで相手の正体がわかったつもりになります。正体がわかれば不安な気持ちを払拭でき、心の平安をとり戻すことができるということでしょうか（八百万の神から闇に潜む妖怪や精霊、あるいはポルターガイストの類まで、みなことごとく名前がつけられているのも、同じ理由でしょう）。私自身を振り返ってみても心当たりがあるのですが、生き物が相手の場合でも同じことで、名前を知ることでもわかったつもりになって安心してしまふのです。逆に詳しい方にとって名前というのは、もちろん親しむための大切な入り口であることに違いはないのですが、それ以上に自分が新たに獲得した知識を整理してまとめる際のしおりの役目を果たしているようなのです。つまり私が言いたいのは、名前を知りたがるよりも、まずじっくりと観察し昔に親

しもうという事です。いま目の前に生えている苔は、確かにそこに存在しており、人間が  
いようがいまいがその存在は揺るぎませんが、名前は人間が自分の都合でつけた、いわば符  
号のようなものです。という事は、苔の名前をやみくもに暗記していても、その名前が指  
し示す植物を実感としてわかっていないのであれば、親しんだということにはならないので  
はないでしょうか。たとえば、苔にはヒツジゴケというものがあると教えられ覚えたとして  
も、「ヒツジゴケって、何ですか?」と聞かれたとき、相手が納得できるようその特徴を教  
えてあげられないのであれば、その知識はなにほどのものではないのです。

名前に囚とらわれるとうまくない理由がもう一つあります。特に苔の場合に顕著なのですが、  
慣れないうちには名前にこだわらないのがよいようなのです。高等植物は古来よりさまざま  
人たちによって識別・利用されてきた長い歴史がありますから、由緒ある名前、聞いてなる  
ほどと思わせられる名前がつけられていることが多いのですが、一方の苔はその他の地味な  
植物と十把じっばひとからげに「コケ」と見下されてきた悲しい歴史を反映して、ごく一部の例外  
を除いて古くからある名前というものがなく、たとえば日本の種類については昭和になって  
から研究者によって和名がつけられた場合がほとんどです。研究者というのはあまり言葉の  
センスが問われることがなく、また苔自体の植物体が小さく肉眼ではその特徴を捉とらえにくい  
ことも相まって、近年つけられた和名にはあまり良い出来映えと思えるものが少ないのです。

ヒツジゴケなんて、いったいどこが羊を思わせるんだと、コケ植物を勉強し始めた当初はかなり不満に思ったことが思い出されます。

### 新種の記載

情報をよりよく整理し、ひいては世界のありようを理解することが、すなわち命名ということになります。和名は日本語ですから覚えやすいという利点がありますが、日本だけで通じる言葉です。ところが日本にある植物が同時に国外にも分布しているのはごく普通ですから、そのようなときに同じものを指し示すための共通の言葉が必要になります。それが学名です。ここでは新種の記載を例に挙げて、学名の持つ意味について考えてみましょう。

自然史博物館や大学など生物の多様性を調べている研究機関では、国内や国外のあらゆる場所で幅広く調査活動をおこない自然史資料を収集しています。集められた資料は、地域の動植物誌の作成や特定の生物群についての分類学的研究などに利用されるのですが、その過程で見つかるのがいわゆる「新種」と呼ばれるものです。新種とは、科学にとってこれまで未知であった分類群（種や属など）のことです。

新種を野外で発見すること自体は、それほど難しくはありません。キノコやごく小さな昆

虫の仲間のように、まだあまり研究の進んでいない分野では、野外で一日採集すれば一〇個以上すぐ見つかることもあるそうです。コケ植物の場合でも、国や地域を選べば新種を見つけたすのはそれほど難しくありません。科学的に意義があり、かつたいへんな手間がかかるのは、新種を見つけないことではなく、自分の採ったものがまさしくこれまで誰も報告したことのない、新しい種であることを確認することにあるのです。コケ植物に限ってもこれまでに一万数千種があることがわかっていますが、すでに異名（同じ種に二つ以上の学名がつけられた場合、一つだけが有効名として生き残り、あとは異名とされます。文献や標本の交換が難しかった昔にはよくあることでした）に落とされたものを含めれば、すでに報告されたものはゆうに一〇万を下らないでしょう。数字に隔<sup>へだ</sup>たりがある理由は、一度は新種として報告されたけれども、のちに詳しく調べたらすでに報告されていたものと同じであることがわかった、という場合が少なくないからです。慎重に作業をしても、間違いはつきものです。たかさんの前例に当たって、本当に「新しい」ことを実証するのですから、とても手間がかかるのです。

だからというわけではないでしょうが、新種を学会に報告する人には、自分で名前（学名や和名）をつけられるという特典があります。学名のつけ方には「国際植物命名規約」という厳格な定めがあります。この規約には必ず従わなければなりません。仮にこの規則に従わ

ずに命名したとしたら無効とされ、誰も認めてくれませんか、科学的には無価値ということになります。和名にはこのような厳格な規則はなく、好き勝手につけてもかまいません。そうはいつても、すでにある和名を無視したり、あるいはあんまり変な名前をつけたりすると黙殺され誰も従ってくれない、というのはどの世界でも同じです。

新種と考える植物を発見した場合、形態的特徴の記載や既知種との比較などについて詳しく検討した結果をまとめ、研究論文を作成します。この論文を学会誌などの学術雑誌に投稿するので、投稿すればそれで終わりではなく、編集委員会による審査を受けます。たとえばコケ植物の論文の場合であれば、同じくコケ植物が専門の複数の研究者によってその論文の妥当性が検討されるわけです。審査を受けたのち必要ならば修正をおこなわなければなりませんし、求められる水準に達していない場合には掲載拒否の判定をもらうことにもなります。このような関門を無事くぐり抜けて論文が受理されると、論文が雑誌に掲載されます。自分だけが勝手に新種だと思ひ込むだけではだめだということがおわかりいただけるかと思ひます。

この論文が掲載されている雑誌が印刷・配布された時点をもって、新種が正式に発表されたこととなります。けっこう面倒な手続きが必要なのです。また、発表されたからといって、すぐみんなが認めてくれるというものでもありません。ここが分類学という学問のちよっと

複雑なところなのですが、雑多で混沌とした世界の中からある特定のものを新種として認識することは、言葉を換えれば「自分は世界をどう認識するか」ということでもあります。認識ですから、人によって意見が異なることが少なからず生じます。ある人が新種と認めても、他の人は認めない、こういった事例はそれほど稀ではありません。それは検討の仕方が甘かったのかもしれないし、あるいはすでに発表されている文献を見落としていたのかもしれない。また生物の常として、変異という問題があります。Aという種とBという種を識別するのに有効だと考えた形質が、もしかすると生育環境の違いが原因で、一緒に植えたら同じ形になってしまうという可能性もあります。たとえば、同じ種が日陰と日向とに生えた場合、形が変わってしまうのはごく普通にあることです。また一般に生物は広い分布域を持っていますから、分布域の北の端と南の端の個体とでは、その場所の気温や湿度、日照時間、あるいは生えている土壌の性質など重要な生態的要因において条件がまったく異なるために、植物体の大きさや葉の形、あるいは毛深さなどが影響を受け、見かけがずいぶん異なることがあります。また、たとえばキク科のアザミ属やイラクサ科のヤブマオ属のように、いままさに進化の真っ最中の仲間では、近縁な種どうしをはっきりしたわかりやすい形質で識別するのがとても困難な場合があります。コケ植物の場合に最も問題となるのは、体のつくりが簡単なので注目すべき形の違いを探し出しにくいということでしょう。それを克服して

種を判別するためのさまざまな手法が開発されていますが、それについては、この本の範囲を超えますので詳しくは触れないことにします。

新種なんてもう現代ではほとんど見つかることはないでしょうね、と質問されることがしばしばあります。しかし、これはまったくの誤解です。いま現在わかっている生物の種類は、およそ一二〇万種といわれています。一方まだ未知のものを含めると、この地球上には三〇〇万種から一〇〇〇万種もの生物がいるのではないかと推定されています。そのほとんどが昆虫や線虫、あるいはキノコを含む菌類など、著しく体が小さかったり採集が困難であったりするものです。植物はみずから動き回らないので見つけだしやすく、すでに九〇%以上が判明していると見なされています。しかし、昆虫やキノコよりもずっと研究の進んでいるこの植物でさえ、毎年四〇〇〇種から五〇〇〇種以上の新種が報告されているのですから驚きです。このようにまだ膨大に残されている未知の種をどのように見つけだし、どうやって能率的に記載してゆくのが、生物多様性を解明するうえでの大きな課題となっています。一人の人間が一年間に記載できる新種の数は、どんなにかんばっても数十が限度です。分野によつては専門家が日本に（あるいは世界に）一人しかいないこと、ときには一人もいないことさえあるのです。このような状況では、いつまで経っても新種の記載が終わりません。分類学は種のありようを研究する学問ですから、新種の記載という一種の戸籍調べが研究の終



着点ではなく、そこからこそが本当の研究のスタートなのです。しかし、記載に手間どる現在の状況では、いつまで経っても肝心なことが始められないことになります。

問題はほかにもあります。これまで分類学という学問は大学が中心となって支えてきました。ところが最近では、分類学のような基礎的な分野の研究予算や人員が大幅に削られ、大学での活動が難しくなりつつあります。この状況は日本に限ったことではなく、アジアの他の国々や欧米でも同じと聞いています。必要性が高まっているのに、それに応えられないのがいまの現実です。解決の方法はあるのでしょうか。一つのやり方は、すでに多くの自然史資料と研究スタッフを抱えている博物館を有効に活用することです。博物館研究員による研究を活性化するだけでなく、将来を担う人材の育成についても博物館の果たす役割がひじょうに重要になってきていると思います。基礎的な研究をおこないその成果を広く公開し、さらに将来を担う人材を育成する。こういった活動を積極的におこなうことも、これからの博物館が果たすべき大切な使命だと思います。

### 野外観察に出かけよう

苔には野外観察に適さない時期というものがありません。いつでも、思い立ったときに出

かけることができます。花があまりない冬のあいだ、気軽に苔観察に出かけてみましょう。ここでは、必要な道具や注意すべきことなど、野外観察のコツといったようなものを伝授いたします。

まず服装ですが、高等植物の場合と一番異なるのは座り込んで観察することが多い点です。特にズボンは汚れてもよいものが必要です。また長い距離を歩くことはまずありません。ゆっくり観察しているとせいぜい一時間に五〇〇メートルほどこしか進めません。水際の苔を見ることが多いのでしたら、長靴をはくのがおすすですが、木に登ったり、道沿いの崖を這い上がったりもしますので、私はいつも運動靴をはいて出かけています。登山靴は不要です。コケ研究者の先輩の中には、地下足袋を愛用している人もいます。

持ち物として、どうしてもはずせないのがルーペです。倍率は最低でも六倍、できれば一〇倍、理想は一四倍以上のものを用意します。ひもをつけて首からぶらさげておけば、うっかりなくすことも避けられます。木の幹や岩の上にしっかりと固着した苔を採るためには、ナイフもあれば便利です。指でむしり取ると、すぐに指先がぼろぼろになってしまいます。カッターナイフは危ないので使わない方がよいでしょう。日本には昔から「肥後守」という折り畳み式の便利なナイフがありますので、それを持ってゆけば十分です。これにもひもをつけておきます。ルーペやナイフはつい置き忘れることが多く、いったん忘れてしまうと後

で取りに戻っても見つけることは容易ではありません。私は老眼が進んできたために、近くに目の焦点を合わせることが難しくなってきました。木の幹に生える苔を観察する場合、どうしても目を近づけることになりすから、余計に見づらくなります。そのような場合は、てんがんきょう 天眼鏡を使うと便利です。見え方にこだわらないのであれば、近所のいわゆる百円ショップなどで買うこともできますが、できれば二〇〇〇円ほど出して両方の目で見られるものを持っていると目が疲れません。

標本を採るならば、それを入れる紙袋が必要です。ダイレクトメールの封筒をためて使ってもよいですし、文房具店で売っている薄い茶封筒を使ってもよいでしょう。要は「一つの袋に一種の苔」を鉄則にすることです。植物をとって紙袋に入れたならば、すぐにマジックインキかボールペン、あるいは鉛筆など水で容易ににじむことのない筆記具で、生えていた場所の特徴を書き込みます。植物の入った紙袋がたまったときにまとめて入れる布袋もあると便利です。紙袋ではなく週刊誌を一冊持ってゆき、採るたびに一頁ずつちぎって包む込むのも手です。私の先生はそうやっておられました。がばっと多めに採ったときなど、かえてこの方が具合がいいようです。

生きたまま持ち帰りたいときは、紙袋に入れてもよいのですが、せっかくの形が崩れたりします。台所用ビニール袋を持ってゆくとよいでしょう。苔を入れた後、息を吹き込ん

でから口をしぼってやればよいのです。チャック付きのビニール小袋を使う人もいますが、値段が高いだけでなく開け閉めが面倒なので、私は使っていません。

カメラで生態写真を撮るのも楽しいものです。最近ではデジタルカメラが普及しましたので、よりいっそう便利になりました。昔は小さい種類が多いですから、どうしても接写することになります。接写性能がよいものを選ぶのが肝心です。普通のフィルム一眼レフカメラであれば、五〇ミリマクロレンズをつけておけば十分でしょう。昔の生えている場所は森の中など光が少ない場所が多いですから手ぶれを起こしやすくなります。ストロボを使うと、どうしても写りが平板になって美しさが減じてしまいますので、良い写真を撮るつもりならば、三脚は必需品です。昔の写真の撮り方については、写真家の方が書かれた手引書を巻末の「おもな参考文献」で紹介していますのでそれを参考にしてください。

### 観察のテクニク

昔を見るにはどういった場所に出かければよいか、始めたばかりの頃一番悩むところでしょう。どうしても、家の周りの公園などから始めてしまうことが多いと思います。しかしそういう場所には大型で目に止まりやすく、そして初心者にも名前が調べやすい種類はあま

り生えていないもので、逆に小さくて同定のきわめて難しいものが多いのです（慣れてしまえば、人家の近くに生える苔というのは種類が限られていますから、ぱっと見ただけで名前がわかるようになるのですが）。初心者にはとっつきにくいもので、専門家でも調べるのがとても面倒なものが少なくありません。このような場所から観察を始めるとすぐに嫌になってしまうことでしょうか。ですから、最初はちょっと足を伸ばして山沿いの谷から観察を始めるのがよいでしょう。一番のおすすめは、お寺か神社の境内けいだいに行くことです。平地、あるいは木の少ない、いかにも乾いた場所ではなく、小川が流れているような、特に山際にある寺や神社が苔の観察には好適です。

なにも苦勞して深い山に分け入る必要はありません。日帰りの気楽なハイキングで行ける場所でも、美しい苔に出会うことができます。といっても、それは意識して探した場合のこと。ふだん私たちは、花や木、虫などといった、ずっと目に止まりやすいものばかりに注意を向けていますから、足下の小さな植物たちは意外に見過ごしてしまっているものなのです。おもしろいことに、人間の目は、ある一定の範囲にあるものだけに反応するようで、たとえば、花ばかり注意して歩いていると、地上数十センチメートルの高さのところまで目の焦点を合わせていますから、地面近くに生えている苔が目には止まらないことになります。地面の高さに意識を集中して見るのが肝心です。もっとも、そんな歩き方をしていると、今度は目の

前に咲いているいろいろな季節の花をすっかり見過ごすことになります。苔観察と花の観察を両立させるのはなかなか難しいことです。

林道の斜面や道路のコンクリート防護壁などでは、たくさん苔が生えているように見えることがあります。よく見ると同じものが一面に生えているのであり、決して種の多様性は高くありません。道路沿いに延々とこんな場所が続くところは避けるか、あるいは足早に通り過ぎる方が無難です。ただコンクリートではなく岩壁になっていて、沢水で濡れている場合はおもしろい苔がたくさん生えていますので、じっくりと観察してください。

先にも書きましたが、学び始めの段階で特に気をつけるべき大切なことは、名前がわからなくてもそれにこだわらないことです。花の咲く植物に親しんでいる方は往々にして、手に取った苔の正確な名前を知りますが、正確な名前がわからなくともそれで満足するものが苔と長くつきあうコツのように思われます。なぜかという、苔は小さな植物でありながら似た種類がひじょうにたくさんあり、顕微鏡を使って細かい部分を観察しないと正しい名前が決められないことが多いからです。また顕微鏡で観察して名前を決める際には、大学や博物館でないと手に入りにくい文献を調べたり、あるいは保管されている標本と比較検討したりする必要が出てきます。それは一般には無理なことですから、名前にこだわる必要がないのです。それよりも自分なりにじっくりと観察して特徴をよく把握しておくことが大切で、

そうすれば次に出会ったときにも同じものをすぐに見分けることができます。たくさんのものの中から識別できることこそが大切で、名前がわからなければ当面は適当な愛称をつけておけばよいのです。

出かける季節ですが、苔観察にベストシーズンというのはありません。観賞するのであれば、もちろん梅雨の頃が一番よいのですが、そうでなければ季節にこだわる必要はありません。苔の多くは乾いたときに独特の形をするものが多く、反対に濡れるとすぐに水を含んでどれもこれもみな同じように見えてしまいますから、雨の日は避けるのが大切です。もちろん雨が降ると暗くて苔観察などできないのではありますが。冬の時期、花の観察が一段落してちょっと暇なときに、苔を狙って出かけてみるのもおもしろいと思います。

最後に。初めのうちは小さい苔はなかなか見つけにくいものなのですが、ここぞと思う場所では、地面に転がっているこれは怪しいぞと思える石を取り、目の高さまで持ち上げ、向こうを透かすように表面を見つめると、数ミリメートルくらいの小さな苔を見つめることができます。これも苔観察特有のテクニクの一つなのです。みなさんも自分なりのやり方をぜひ探し出してください。そうすることで、専門家でさえ見逃している未知の種類を見つげだすことができるかもしれません。

## 苔を退治する

庭の嫌われ者といえは「ゼニゴケ」。悪名高いこと、この上なしです。この「ゼニゴケ」と呼ばれているもの、かなりの確率で本当のゼニゴケではないでしょう。特に西日本では、ゼニゴケというのはどちらかというところとあまり見かけない苔だからです。それと入れ替わるかのように、ジャゴケやジンガサゴケ、フタバネゼニゴケ、とりわけ最近ではミカツキゼニゴケといった葉状苔類が増えています。それはともかく、庭に侵入してきた「ゼニゴケ」を丁寧に手で取り除いてやっても、厄介なことに無性芽をつけるものが多く、こぼれ落ちた無性芽が地面の中に潜んでいてしばらくするとまた生えてくるという、イタチごっこになってしまいがちです。このしつこさゆえに嫌われるのでしょう（私にはそこがかわいいとも思えるのですが）。

ゼニゴケの仲間に限らず、コケの退治方法としていろいろな手法が開発されています。一番ポピュラーなのが刷毛で食酢を塗る方法です。効果を示すのは酢の中に含まれている酢酸という成分です。なかなか効果がある方法なのですが、塗った個体は死んでもそのあとにまた生えてくるようです。また酸っぱい匂いが立ちこめるのも難点で、世の中には酢の匂いが



嫌いな人が案外多く、あまり使いたくないという人もいることでしょう。大きな園芸店などでは「コケレス」という粉末の商品が売られています。水に溶かして使うのですが、この有効成分もたぶん酢酸と思われます。新聞記事（二〇〇二年一月一六日付『朝日新聞』夕刊）によると、銀閣寺ではゼニゴケ類の退治に塩化カルシウムの水溶液を塗布とくしているとのこと。以前は酢を塗っていたのですが、来観者に酸っぱい匂いが不評だったことからほかの薬品をいろいろと試しているうちにこの薬剤を使ったところ、たいへん良い効果を得たとのこと。濃度の調整が難しいようですが、残留効果もあるとのこと。

芝生の管理が大切なゴルフ場では美しいギンゴケも大敵のようで、何度か相談の電話がありました。ただその苔が本当にギンゴケなのかどうかは怪しいところ。私の勤める人と自然の博物館の周辺の芝生ではギンゴケはあまり生えず、コスギゴケとスナゴケがよく目立ちます。芝の枯れる冬から春にも緑色を保つので私にはとても好ましく見えるのですが、ゴルフにはきつとじゃまなのでしょう。

ゴルフ場とは逆に、庭に生えた大事な苔を悪い雑草から守るためには、どうすればよいのでしょうか。面倒くさがりの人が庭の雑草を退治する場合、除草剤などの農薬を撒くことになりませんが、うまいことにこの除草剤、種類によっては苔には効き目を及ぼさないのです。グラモキソンという商品（有効成分はパラコート）がスギゴケに対する薬害がほとんどない

ことからよく使われていて、どんな草も枯らしてしまふけれども苔にはほとんど悪影響がなくかえって青々とするくらいだといわれています。この薬剤はいまでは製造されていませんので、他の成分を混ぜた除草剤（ブリグロックスなど）が代用品として使われています。

### 手間のかからない栽培法

次に栽培に移りましょう。

いまや苔玉として突然人気者になった苔ですが、昔も飾りとして使われたことはあったようです。私は自分で見たことにはないのですが、コウヤノマンネングサを色づけして水と一緒にピンに詰めたものが水中花として売られていたという記事を読んだことがあります。また、本場の和歌山県高野山（こうやさん）では少なくとも一九一七年（大正六年）当時、コウヤノマンネングサの茎を数本束ねたものが土産物として売られていたそうなのですが、いまではすっかり忘れ去られているようです。

さてコケ植物の大きな特徴の一つに、腐りにくいということがあります。野外で採集した新鮮な植物を口をしっぴり閉じたビニール袋に入れておけば、数週間から数ヶ月は元気な姿を保てます。この性質を利用すれば、とても簡単にコケ植物を栽培することができます。冷

藏庫に入れておけば呼吸で消耗しょうりょうすることもありませんので、乾燥にさえ気をつければもつとずつと長く生かしておくことができるでしょう。ただし明かりは必要です。

コケ植物を栽培するうえで最も大切なことは、蒸らさないことと肥料を与えないことです。夏の日が特に注意が必要で、水を撒いた後に強い日差しにさらされると蒸れることになるのです。室内に置く場合は、光合成をおこなわせるためにある程度の日光が必要ですから、日当たりには注意します。コケ植物すなわち薄暗い場所、という固定観念を持っているとすぐに枯らしてしまうことになりかねません。苔玉はつくった当時は美しくとも、はたしてどれだけの人が室内に飾られた苔玉を長持ちさせているのでしょうか。

### テラリウムによるポット栽培

大型のガラスの容器で栽培する方法です。特に上部に直径一、二センチメートルほどの穴をあけておくと、ガラス壁内面が曇らずいつでも苔の姿を楽しめます。

以前はテラリウム用として底がはずれて作業のしやすいガラス容器が販売されていたのですが、いまはないようです。おかず用のプラスチックのバックや金魚鉢、熱帯魚水槽といったような、ある程度深さのある透明な容器を流用すれば、見かけさえ我慢すれば、安上がりにつくることができます。よく消毒した土を底に敷いてやり、そこに苔を植えつけます。初

めに十分に水やりをしてやれば、あとは蓋ふたをしておくだけです。

過湿な状態にしていると、カビが生えてくることがあります。苔そのものはカビにやられることはあまりないのですが、それ以外がやられてしまうのです。特に紙のラベルなどはすぐにぼろぼろになってしまいますから、いっどこで採集したものかわからなくなりがちです。ので注意が必要です。

苔を植えつける土は、滅菌消毒した日向土ひやうがつちや鹿沼土かぬまつちにパーミキュライト（園芸用の人工土）とピートモス（乾燥させたミズゴケ）を加えたものがよいとされています。市販の消毒された用土を用いれば簡単ですが、家庭にあるオーブンレンジで用土を滅菌する方法もあります。ちょっと楽しむだけならば、あまり神経質になる必要はないでしょう。私は無精なので、いつも消毒せずに使っています。

完成したテラリウムは、蒸れを防ぐために直射日光の当たらぬ場所に置きます。数ヶ月に一回程度の水やりで大丈夫です。

### 沈水培養

多くの種類の苔が水辺を好んで生育していて、なかにはマリゴケのように水中に群落をつくることさえあります。そんなコケ植物の性質を利用したのが、沈水培養すいすいという栽培方法です。